第12部会

し、一九八〇年代以降に設立された団体は、ウェールズ発祥の
 図像トリバンではなくトリスケルをシンボルとして重視する傾
 向が強い。また、今日トリスケルは、ケルト的要素をルーツに
 もつとされる地域の多くで「生+死+再生」と理解されている
 が、ブルターニュでは例外的に、ドルイディズムの四元素に対
 応した「火+水+土(空気)」説が優勢である。この新たな解釈
 は、図像に託された意味が図像自身の意味へ変容した結果とみ
 なすことができる。

クレーデン・ゲルティエックの指導者M・マルシャルとモル
 ドレルには、共に雑誌『永遠なるブルターニュ』(Breiz Atao)
 の創刊に関わる等の接点を確認できるため、両者の活動が融合
 し、ドイツのように民族主義宗教運動となる可能性もあつたと
 いえるが、カトリックに対する立場の相違により、高次の連携
 現象は生じていない。だが、他地域との境界化をはかるため、
 自らのイデオロギーが程度の差こそあれ可視化したものとして
 トリスケルを受容、使用している点は、両者に共通のものであ
 る。

トリスケルに関する先行研究の課題は、古い図像がより後代
 で、そして、発生した地域とはときに異なる地域で受容される
 事例、その際の契機や思想的戦略に踏み込めていない点にあつ
 た。ここでは「ブルターニュのトリスケル」という現代的展開
 事例の検討を通じ、図像、そして図像と関連する諸要素の宗教
 性について、宗教学の観点から考察する方法を探るとともに、
 図像の意味と図像に託された意味の相互補完的循環関係に着目
 してきた。

なお、トリスケルはブルターニュの独自性を主張する「見せ
 る」図像のみならず、古代ケルト起源をもつ地の果て(Finis
 terra)であるエキゾティシズムといった、集団外から要請され
 るブルターニュ観に対応可能な「見られる」図像でもある。こ
 うした要素も含め、トリスケルを巡る諸展開と宗教性との関連
 を継続的に精査することが必要と考えられよう。

柳宗悦の自然観

本 多 亮

柳宗悦は民芸運動の創始者として有名だが、本来は宗教哲学
 者である。その哲学的営為は生涯止むことなく続けられた。柳
 の思想的な背景は、キリスト教の神秘思想、エマソンの超越主
 義、ブレークの世界観、鈴木大拙や西田哲学等いくつかある。
 全体的に見ると神秘主義的傾向が強い。そんな柳の思想を合理
 主義の時代に理解するのは難しい。そこで、本発表では扱う範
 囲をごく狭く限定し、柳の民芸論で用いられる「自然」という
 言葉を考察することにより柳哲学解明への一歩としたい。

柳の最初の民芸論は、三十七歳のときに新聞に掲載した「下
 手ものゝ美」(大正十五年)である。後に加筆訂正して「雑器
 の美」と題を改めた。この「雑器の美」は、これ以後に書かれ
 た民芸論に比べて荒削りの感があるが、民芸の美に関する柳の
 基本的主張はほぼ網羅されている。そこで、この「雑器の美」

を用いて柳の考える「自然」について検討しよう。

さほど長い文章ではない「雑器の美」の中に、「自然」という単語は全部で二十二回も出てくる。そのほか「天然」や「自から」といった「自然」と関連する単語もいくつか使われている。それらの意味を分類すると、だいたい三種類にまとめられる。はじめに、一般的な意味での自然で、自然が豊富であるとか自然現象という場合の自然である。つぎに、意識を介在させない行為や、なめらかな動きという意味での自然である。つまり、自然な振る舞いとか自然に動いたという場合などの意味である。三つ目は、特別な存在としての自然である。この三番目の自然は、明確に説明されてはいないが、文脈上、何か特別なものと理解するしかないものである。そして柳は、一番目と二番目の自然の根底に常にこの三番目の自然を忍ばせて発言している。

何か特別な存在としての自然、これを理解するために、柳が宗教哲学者として活躍していたときの論文「宗教的自由」（大正五年）を参照しよう。これは人間をめぐる自由論と決定論の相克に関する論文である。柳は言う。相対的次元においては決定論が正しいことは疑い得ない。だが、絶対域においては実在との一致により人間は絶対的自由すなわち宗教的自由を得ることができると。それでは実在とは何か。それは神のことである。

柳の言葉を直接引こう。「哲学又は宗教的見地を去って芸術的に此自由を解こうとするならば、実在若しくは神と云う代りに自然と云う言葉が最も之に適當するであろう。ここに自然と

はもとより現象に終る形体自然を指すのではない。万象の内裡に流れる自然そのものの心を云うのである。一切の自然性の泉を示すのである。」（原文正字正かな）

昭和を迎え民芸運動にますます奔走する柳は、一見すると宗教哲学を忘れてしまったかのように思われたが、昭和二十四年に宗教哲学と美思想の結合した作品『美の法門』を発表する。ある時柳は、『無量寿経』の法蔵菩薩の四十八の大願を読んで、美に関する積年の疑問が解ける体験をする。その体験を元に一気に書き上げられたのが『美の法門』であり、これは柳晩年の美思想を理解するために最も重要な論文である。その『美の法門』で柳は「自然」に対する考えをさらに一歩前に進めることになる。

中世禅宗寺院の伽藍空間における 宋代風水術の影響について

鈴木 一 馨

本論の大きな目的は日本風水史の解明にある。これについてはすでに「風水説の受容」（増尾伸一郎他編『環境と心性の文化史』上、勉強出版、二〇〇三）にてデッサンをしておいたが、その過程で特に日本風水史の上で転機と考えられたのが、中世の日宋交流に伴う宋代風水の受容である。

中国では九世紀末期から十世紀初期（唐末～五代）にかけ